

自閉スペクトラム症受け身型大学生への支援

(特別支援教育講座) 小野啓子

(元 心と体の健康センター) 新宅文子

Support for a Student of Passive Attitude with Autism Spectrum Disorders

Keiko ONO and Fumiko SHINTAKU

(平成 29 年 8 月 31 日受理)

抄録：自閉スペクトラム症児・者の社会的相互作用の類型(Wing,1996/1998)¹⁾のうち、受け身型の子ども達は、幼少期は目立ったトラブルを起こさないことから、発達のみならず気づかれぬまま成長し、青年期以降になって初めて不登校や引きこもりといった不適応を起こす。大学生になって初めて不登校となり、大学の相談機関に来談した男子学生Aさん(以下A)は、在学中に専門機関において広汎性発達障害疑い(DSM-IV-TR)と診断された。来談当初は支持的ガイダンスを期待している様子が伺え、受け身型の主症状である「主体のなさ」を呈していた。Aは、相談期間中盤より家族の勧めでアルバイトを始め、そこでも不適応を起こした。しかし、アルバイトは今後も継続することを自らの意志で決めた。大学、アルバイト、2つの場面で不適応を起こしたにも関わらず、大学は不登校、アルバイトは継続というAの対応の違いに着目し、相談場面でAが語った大学とアルバイト先でのエピソードを分析し、その背景について考察を加えた。不適応場面との比較のために、Aにとって居心地の良い場所である家庭でのエピソードについても抽出し分析した。その結果、清掃という身体性を伴ったアルバイトを通して、自他の境界を体感できるようになり、他者からの、悪意とは異なる容赦ない指示やことばかけを通して自らについて客観的に振り返り、主体的な判断ができるようになっていった過程が明らかになった。

キーワード：自閉スペクトラム症 受け身型 主体

I. 問題と目的

自閉スペクトラム症児・者の社会的相互作用の類型(Wing, 1996/1998) 孤立型, 積極・奇異型, 受け身型, 形式ばった大仰な群のうち、受け身型の子ども達は、幼少期は目立ったトラブルは起こさず、一見、場面に適応しているように見える。そのため、発達のみならず気づかれぬまま、乳幼児期から学童期を過ごすことが

多い。しかし、青年期以降になると、反動のように大きな問題が出てくること(内山ら,2002)²⁾や、受け身性が固定化して行くことが指摘されている(松本,2015)³⁾。

近年、大学生になって初めて、不登校や引きこもりといった不適応を起こす事例が増えている。その背景の一つとして、受け身型の主症状である「主体のなさ」を伴う未診断の発達障害が挙げられる。彼らは、高校までは

周囲の要求に応じていくという方法で、対応してきた。大学では、選択や自己決定を求められる場面が多くなり、そのことに困難さを感じて適応していくことが難しくなっている。一方で、親しい友人や家族との関係は良好であり、その中ではこれまでと変わらずに静かに穏やかに過ごせていることが多い。

本論では、大学生活への不適応から授業に出られなくなり「勉強に前向きになれない」という主訴で来談した男子学生Aとの1年6ヶ月にわたる相談場面での関わりを、「主体のなさ」を伴う受け身型のクライアントに対する支援という観点から振り返る。本事例では、卒業や就職といった目に見える成果は得られなかったが、相談終盤でのAの言動からは、主体の立ち上がりとも言える、意識の変化が感じられた。

Aは大学とアルバイトの2つの場面で、不適応を起こしていた。大学は不登校状態となったが、アルバイトは投げ出すことなく通い続けた。この対応の違いに着目して、相談場面でAが語ったエピソードから、大学でのエピソード、アルバイト先でのエピソード、Aにとって居心地の良い場所である家庭でのエピソードを抽出し、それらを比較検討しながら分析した。そして、大学は不登校、アルバイトは継続という2つの不適応場面でのAの対応の違いの背景について考察し、受け身型の大学生への支援のあり方について検討を加えた。

II. 方法

1. 対象者

B県内の大学の相談機関に来談された20代男性A

2. 相談期間・相談回数

相談期間は、201X年1月～201X+1年8月までの1年半であり、週に2回、または、2週に1回のペースで、途中の中断はなく、継続的に行われた。総相談回数は、58回であった。

3. 事例の概要

来談経緯：自主来談

主訴：「勉強に前向きになれない」

Aは高校時代までは、大きなつまずきやトラブルもなく過ごしてきた。幼少期から根っこに悩みはあるものの、悩むのではなく、周囲に合わせることで適応してきたと

のことである。大学では友達付き合いが薄くなり、次第に授業に出られなくなっていった。筆者はAの不登校の背景に、「主体のなさ」を伴う未診断の発達障害が疑われると見立て、医師による診断が可能な専門機関の受診を勧めた。Aは大学在学中に専門機関を受診し、医師より広汎性発達障害疑いと診断されている。

来談当初は「自分はどうしたいのかははっきりしない」「深く考えないようにしている」「卒業に関しても大学からはっきりと言われた方が楽」とのことで、何らかの指示的ガイダンスを期待している様子が伺えた。家族は穏やかにAを受け入れており、時々会って一緒に出掛けることができる幾人かの友人もいた。

Aは相談期間の中盤からアルバイトを始めた。家族の紹介ということで始めた清掃関係のアルバイトであったが、仕事が効率よくこなせず叱責されること、過密なスケジュール、突然スケジュールが変更されることなど、Aにとってはかなりのストレスのかかる場面であった。しかし、Aは、「バイトは行ったら行ったらで面倒くさい。でも休むと何か引っ掛る」「バイト先では、いても迷惑をかけているが、いなくなると迷惑だけになってしまおう」と、投げ出すことなく通い続けた。

結局、Aは大学を離れることとなり、相談は終結し、卒業や就労といった目に見える形での結果には至らなかった。しかし、相談が終盤になるにつれて「これまでになかった初めての感覚」や「客観的に気づいた・・・」といった自らの内面を主体的に語ることばが聞かれるようになった。

4. 手続き

相談場面でAが語ったエピソードから、大学でのエピソード、アルバイト先でのエピソードを抽出し、それらを比較検討しながら分析した。また、不適応を起こしていた2つの場面のエピソードと対比するために、Aにとって居心地の良い場所である家庭でのエピソードについても抽出し分析した。

<エピソードの抽出>

A自身が相談場面で語った、A自身の活動「誰と、何を、した」の要素を含むものを1つのエピソードとして抽出した。そのエピソードについてA自身の心情について語られた場合は、その部分をエピソードにおける事実

と区別して抜粋し記述した。抽出されたエピソードは、
①家庭：36 ②大学：40 ③アルバイト：29 である。
趣味の音楽に関係することや、小中学校時代のこと、友人関係のことなどを含めたエピソードの総数は183であり、相談場面で語られた順に通し番号で整理した。家庭、大学、アルバイトの3つの場面以外のエピソードは、今回の分析の対象から除外する。

<エピソードの分析>

エピソードの分析は、筆者ともう一人の臨床心理士の2名（以下筆者ら）で行った。エピソードの内容は、場面に適応しているように見える肯定的なものと、場面への不適応が感じられて困難さを感じさせるもの、の大きく2つに分けられた。また、一つのエピソードでも、A本人と、筆者らとの受け止め方が違うものもあった。例えば、本人は困難さやしんどさを感じていない様子だが、筆者らの視点からすると、不自然で、どこか周りの感覚とはずれていると思われるものである。

そこで、筆者はAが語ってくれたエピソードについて、以下のような方法で分析し、検討を加えた。

<肯定的なエピソード>

- ①本人なりの方法で適応できている (○) or 適応できていない (-)。
- ②他者から見て適応しているように見える (○) or 適応していないように見える (-)。

<困難さを伴うエピソード>

- ③本人が困難さを感じている (△) or 困難さを感じていない (-)
- ④他者から見て困難さを感じる (△) or 困難さを感じられない (-)。

エピソードの分析に関しては、筆者ともう1名の臨床心理士が独立して判定を行った。分類について意見が分かれた場合は、2名で協議して判定しなおした。判定の一致率は、①家庭：92% ②大学：93% ③アルバイト：83%であった。

これらの分析の結果を、エピソードそれぞれについて以下のように記号で表すこととする。

<肯定的なエピソード>

- 本人・他者：一致 ①○②○ ⇒ ●
- 本人・他者：不一致 ①○②- or ①-②○ ⇒ ○

<困難さを伴うエピソード>

- 本人・他者：一致 ③△④△ ⇒ ▲
- 本人・他者：不一致 ③△④- or ③-④△ ⇒ △

※一つのエピソードの中に肯定的 (○)、困難さを伴う (△)、の両方の側面が感じられるエピソードもあった。それらについては、本人と他者の一致に関わらず、■の記号で表示した。

例) No.133 場面：大学

「少人数の文献購読の授業は悪くない。いつも意見を聞かれるが、上級生なのにわかっていない。」

この場合、肯定的、困難さを伴う、の両方の側面が感じられるとして、分類は、

- ①○ ②○ ③△ ④△ とし、⇒■で表す。

また、一般的にみると困難な状況であっても、本人なりの方法でその場面になんとか適応している部分もあると判断したものもある。

例) No.109 場面：大学

「勉強は驚くほどやっていない。一科目、もうやめた。やる気がないとかではなく、ストレスになりそうなことには向き合わないようにしている。癖になっている。真面目に考えると堪える。普通でいられなくなる。」

この場合、Aにとっても、他者から見ても困難さを伴うエピソードと見なされるが、Aはストレスになりそうなことには向き合わないという方法でその場に適応しているともみなすことができる。そこで、分類は、

- ①○ ②- ③△ ④△ とし、⇒■で表す。

エピソードについて、A自身がどう思ったのかについて

て語っている部分については、記号での表記と共に、エピソードから抜粋して別途記述した。

III. 結果

エピソードの分析の結果をグラフ化してみると、以下のようになった。

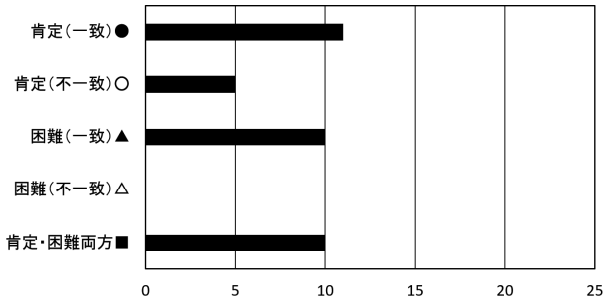


図1. 家庭でのエピソード分析

図1は、Aにとって居心地が良い場所である家庭でのエピソードの分類である。肯定的なエピソードと困難エピソードが混在している。また、肯定的エピソード(①②にあたるエピソード)での、本人と筆者らの捉え方にズレがあるものも見られる。具体的には、

No.28:「実家暮らしに問題を感じない。ずっとリビングにいる。自分の部屋が欲しいとか、一人暮らしをしたいとかは一度も思ったことがない。」

①○ ②- ③- ④△ ⇒■

No.126:「保護者の配慮で不得意な教科を個人的に習いに行っている。」

①○ ②- ③- ④- ⇒○

などのエピソードである。家族との関係は穏やかで良好である。大学生活がうまくいっていないAを、そのまま受け入れてくれている温かい家庭であり、Aの素直な性格は、間違いなくこういった環境で育まれたものである。一方で、いつも家族と一緒にいるという物理的な境界のなさによりしんどさを感じないところや、一人暮らしなどの家族との分離をイメージできないところ、保護者の先回りの配慮に戸惑いながらも、自身の意志で「NO」と言えないところ等については、20代半ばというAの年齢を考慮すると、やはり未熟さが伺える。

困難を伴うエピソード(以下 困難エピソード)については、No.88で、アルバイトを始めることになり、No.89で、医療機関から広汎性発達障害疑いと診断され

た以降のものがほとんど(9/10)である。

アルバイトを通して、やりたくない仕事や、やりたい仕事について考えるようになった(No.130)こと。また、通常の就職活動を期待して、応援してくれようとする家族(No.143, 177)と、医療機関の受診により、それが難しいということを提示され、A自身や家族が受け入れていくまでの葛藤が感じられた(No.132,134,175,177, 178,181)。

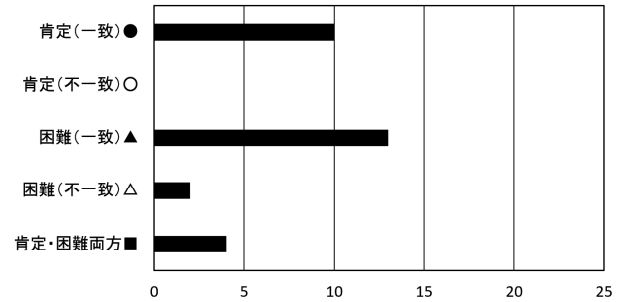


図2. アルバイトでのエピソード分析

図2は、アルバイト場面のエピソードの分類である。内容的には、

No.90「アルバイトの後、授業にも出席して頑張っており、次第に日常生活での活動もテキパキしてきた。」

①○ ②○ ③- ④- ⇒●

No.151「バイトのメンバーが良いと少しずつ現場で、自分が判断することもできるようになってきた。」

①○ ②○ ③- ④- ⇒●

などである。やらなければいけないことができ、実際に行動し始めたことで、様々なことを体験的に実感できるようになった様子である。アルバイトは、相談場面でも何度か勧めていたが、なかなか仕事を探すところまでは至らなかった。アルバイトのイメージが湧かなかった様子である。今回のアルバイトは、家族の知り合いからの紹介である。人生初だったが、比較的迷わずに飛び込めたのは、紹介がAにとって全く知らないルートではなかったことも大きい。また、アルバイトを続けていく中で、自分自身の苦手なことについて、具体的にことばで伝えてくれるようになった。

No.159「とりあえずすぐに返事をするが、瞬時の判断が難しい。聞き返してよいと言われるが、そう

すると、テンポが悪くなるし・・・と思う。」

①－ ②－ ③△ ④△ ⇒ ▲

No.160 「2つのことを同時にすることが難しい。バイトの現場ではいきなり指示が飛んできて難しい。」

①－ ②－ ③△ ④△ ⇒ ▲

No.161 「長い文章で説明されると集中が切れてしまう。短く言い切ってもらえると良い。話のタイミングでここかな、と思うところで目を合わせて相槌を打っている。」

①○ ②○ ③△ ④△⇒ ■

そして、アルバイトそのものについては、

No.111 「バイトは休むと何か引かかる。(大変でもバイトを投げ出さないところが偉いと褒めると) 居てもいつも迷惑をかけるが、いなくなると迷惑だけになってしまう。」

①○ ②○ ③△ ④△ ⇒ ■

と語っていた。しかし、それほどしんどい思いをして稼いだバイト代については、「お金を貯めるという思いもないし、考えたこともない(No.91)」と無頓着であった。

①－ ②－ ③－ ④△ ⇒ ▲

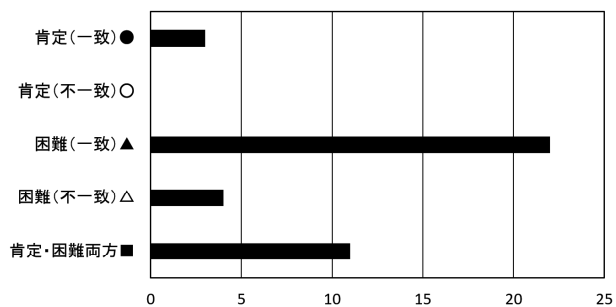


図3. 大学でのエピソード分析

図3は、大学場面でのエピソード分類である。困難エピソードの多さが目立つ。相談の初期は、

No.3 「これからどうしたいのかははっきりしない。」

①－ ②－ ③△ ④△ ⇒ ▲

No.13 「昔から(クラスで)自分が何かをやって反応してくれるのは嬉しかったが、大学ではクラスがない。」

①－ ②－ ③△ ④△ ⇒ ▲

No.32 「昔から穏やかに生きてきたから、打たれ弱

い。」

①－ ②－ ③△ ④△ ⇒ ▲

No.33 「(単位を落として)置いてきぼりになっていることさえ気づいていなかった。」

①－ ②－ ③△ ④△ ⇒ ▲

といった、現状に困ってはいるがどこか周りのペースからずれているような印象のものが多かった。しかし、同じ困難エピソードに分類されているものでも、アルバイトを始めて(No.88)からは、少しその内容が変わってきた。

No.103 「授業がつまらない。笑いもなく、興味を引く話し方でもない。」

①－ ②－ ③△ ④△ ⇒ ▲

No.120 「ちゃんとした説明もない授業。この先生だけはダメや。今までこんなふう思ったことはなかった。」

①－ ②－ ③△ ④△ ⇒ ▲

など、Aさん自身の生々しい感情が、具体的で強いことばで語られるようになってきたのである。そして受講生が少ないながらも出席していた授業について、

No.145 「自分の役割があるので、(この授業は)放り出せない。」

①○ ②○ ③－ ④－ ⇒ ●

No.148 「テーマ的に面白い授業がある。意味合いはつかめているが、いざことばで説明しようとする」と難しい。」

①○ ②○ ③－ ④－ ⇒ ●

のように、授業に主体的に参加している様子が伺えるようになった。

IV. 考察

1. 各場面のエピソードの分析から

(1) 家庭

アルバイトを始めてから(No.88以降)は、父親の期待に応えられないAの葛藤や、現在の自分の状況についての明確な思いが言語化されるようになり、Aと筆者ら、双方が困難エピソードと判断できるものが増えた。

No.130では、母親との会話の中で、自分の仕事として絶対にやりたくないものとして、「プロの掃除屋(アルバイトではやっているけれども)」を挙げ、「歴史や文

化に関わることが好きで、あえて言うなら民俗学の研究などがしたかった。現在の学部に入ったのは大間違いだった」と話した。「就職」「仕事」というものに対してイメージが湧かないと、相談場面で繰り返し語っていたが、A自らが、「適性がない」と言う今の清掃のアルバイトの体験を通して、やっと「仕事」というものをイメージするようになったと思われる。

また、No.153 では、家庭に問題のあるアルバイト先と同僚と自分を比較しながら、自分は家庭に問題があるわけではない、家を出るつもりはないと述べている。アルバイトが契機となり、社会との接点ができ始めたことにより様々な気づきが生まれた。これまであたりまえにあるものとしてきた家庭についても、考えることができるようになり、アルバイト開始以後、家庭場面での困難エピソードが増えたにも関わらず、家庭は自分にとって大切な場所であるということを、実感を伴って再認識できている。

(2) アルバイト

アルバイトを初めて間もない頃は、「働いている自分についてどう思う？」と尋ねたところ、「さあ・・・」とのみ答え、自分自身についてはあまり思うことがない様子であったが、実際に行動し始めたことにより、日常生活での活動性も上がってきた。さらに、今まで経験したことのない、他者からの手加減のない指示やことばかけを通して、自分自身を客観的に捉えることができ始めた。No.160 では、バイト場面での指示とそれに対する自分の対応を振り返りながら「自分は、2つのことを同時にすることが難しい」と自分の行動を客観的に分析している。

その後も、しばらくは、「バイト先で、話し方や空気が苦手な人がいる」「バイト先での達成感や、自分が役にたっているという実感はない」と、うまく適応できていない様子が伺えた。しかし、次第に「バイトの現場で、普段の自分とバイト先での自分のモードが違うことに客観的に気づいた。初めての感覚」「家族と違って、バイト先の先輩という距離感の人とのやり取りは難しい」と、家族とは違う他者との関係性の中での気づきが、主体的なことばで語られるようになった。

さらに、No.173 では、バイト先の怖いスタッフに怒られたというエピソードの中で、「どうでもいいやつに

は、こうは言わん、と言われたので、心にはかけてもらっているのかと思う」と述べており、実際のことばとは異なる他者の本来の意図についても、実感できるようになっている。

No.182 では、家族の友人で、バイト先のスタッフでもある人から、「久しぶりに話さないか」と電話をもらい、バイト先でのAの頑張りを認めていることや、今後のことについて励まされた。「久しぶりに認められて、なんか変な感じ」「高評価な部分があったことにびっくりしている」と喜びながら、「家族がらみの気遣いではなく、純粋な気遣いから声をかけてくれたと思う」と、素直に感謝の気持ちを表現している。

大学を離れることが決まった後も、「これまで選択や決定ができていなかった。バイト先では、全否定されているわけではなく、バイトをやめるという選択肢は、今のところない」と、今後もアルバイトを継続していくという意志を示した。

(3) 大学

アルバイトを始める以前と以後では、困難エピソードの内容が大きく異なっている。相談当初は、授業を含め大学生活での困難さを話す時は、どこか他人事のように淡々と語っていたが、次第につまらない授業や、見下したような発言をする先生に対しては、容赦なく激しいことばで批判するようになった。また、卒業はもう無理であるとわかっていても、自分の役割がある、と判断した少人数の授業には主体的に出席している。

No.125「中学の頃から家庭のリビングのど真ん中で、友達の有無に関わらず、ずっと10年間ネットでしゃべってきた。大学では誰とも話せなかった。携帯があつて良かった」というエピソードの中で、「アルバイトでは、かなりきつく叱責されるが、ふれあいがないよりは、怒られている方がマシ」と述べている。アルバイト場面での、実感を伴った他者との関わりを経て、次第に大学の授業にも、授業内容や先生の好き嫌いという点も含めて、主体的に臨むようになった様子が伺える。

2. 実感を伴った他者との関わりを通して育つ主体性

田中(2010)⁴⁾は、「主体のなさ」が、発達障害の中核症状であるとして、その心的状態を「生物学的誕生以後、心的誕生以前の状態」としてしている。そして、主体をつくりだす心理療法について言及している。いか

んともしがたい生まれ難さの中で、そこここに居心地の良い子宮をつくりだし、そこにとどまろうとする彼らを、限りなく同型に近い他者として、どこへともなく蹴りだすという働きかけである。

Aの場合、アルバイト場面での悪意とは異なる容赦のない指示やことばかけが、田中(2010)の「どこへともなく蹴りだす」という働きかけにつながったものと思われる。筆者は、来談当初、Aの不登校の背景に「主体のなさ」を伴う未診断の発達障害が疑われる、と見立てていた。そこで、相談場面でも、小さなこと、例えば、面接のペースを週1回にするか、2週に1回にするかといったことについて、意識的にAに選択や判断を委ねてきた。こういった筆者の働きかけに対してAは「考えたことがない」「わからない」と答えていた。これまでのように、支持的ガイダンスに沿ってその場に適応しているように見えていたAは戸惑った様子であった。しかし、こういった筆者の意識的な小さな関わりの積み重ねだけでは、Aを「蹴りだす」ことはできなかった。

アルバイトが、Aにとって「蹴りだす」働きとなり得たのは、清掃というアルバイト活動が、身体性を伴ったものであったことが大きいと思われる。自他の境界を、身体性をともなった活動を通して体感することで、実感を伴った他者との関わりとなり、それによって、Aは「蹴りだされる」ことができたのではないだろうか。

Aにとって居心地の良い場所として機能している家庭の役割について触れておきたい。主体のぶつかりあい、とも言える「蹴りだす」という働きかけは、主体の立ち上がりのきっかけともなり得るが、非常に危険な側面も含んでいる。Aは自分を穏やかに受け入れてくれている家庭について、文句や葛藤を示しながらも、自分にとって大切な場所であると認識している。居心地の良いところにとどまろうとしている状態から「蹴りだされる」という心理的な痛みを伴う働きかけを、Aは主体の立ち上がりのきっかけとすることができた。これは、家族との基本的信頼感に基づくAの安定した情緒と、物事を素直に捉える純粋さという、穏やかな家庭で生まれた人としての基盤によるところが大きいと思われる。

最後に、1年半に渡る相談場面での筆者との関わりは、Aにとってどのような意味があったのだろうか。Aは折に触れて、「これまで、自分のことをこのように他の人

に話したことはなかった」と述べている。週に1回、または、2週に1回というペースで、定期的に自分の体験や思いを言語化することは、Aにとって、自らの行動や思いを認識し整理するという体験の積み重ねとなっていたようである。

発達障害児・者の心理療法は、受容と共感だけでは成り立たないとされて久しいが、「主体のなさ」を主症状とする受け身型のタイプの場合、さらにその傾向が顕著である。Aにとってのアルバイトのような、実感を伴った他者との関わりは、傷つきを伴うものであるかもしれないが、それなくして主体の立ち上がりは望めないとも言えるのではないだろうか。

V. 今後の課題

青年期以降になって初めて不適応を起こす事例のほとんどが、幼少期から困難さを自覚している。主体の育ちの原点は、乳幼児期からの他者との豊かな相互作用の中にある。今後は、受け身的に行動することでトラブルを起こさず、一見してつまづきが目立たない子ども達にも丁寧に目を配り、生活や遊びを通して丁寧に主体を育てていくという関わりが必要であると思われる。

VI. 参考文献

- 1) Wing,L.(1996).The autistic Spectrum :A guide for parents and professionals. 久保紘章・佐々木正美・清水康夫(監訳)(1998) 自閉症スペクトラムー親と専門家のためのガイドブック. 東京書籍
- 2) 内山登紀夫・水野薫・吉田智子(2002). 高機能自閉症アスペルガー症候群入門. 中央法規
- 3) 松本拓真(2015). 自閉症スペクトラム障害の子どもの受け身性が固定化する一機序：親子の相互作用と親にもたらす苦悩. 発達心理学研究, 26(3),186-196.
- 4) 田中康裕(2010). 大人の発達障害者への心理療法的アプローチー発達障害は張り子の羊の夢を見るか?. 河合俊雄(編). 発達障害への心理療法的アプローチ. 創元社. pp.80-104.

